上田紀行・東海学園大学特命副学長 インタビュー 前編

旧東京工業大学（東京医科歯科大学と10月1日に統合、東京科学大学に）の前副学長でリベラルアーツ（教養）教育の第一人者、上田紀行氏が4月、東海学園大学（名古屋市天白区）の特命副学長に就任した。理系の旧東工大で古代ギリシャ哲学に通じる「人を自由にする技」（リベラルアーツ）教育を実践、学生から絶大な人気を集めるなど名物教授として活躍した。「癒し」という言葉を広めた文化人類学者であり、主著「生きる意味」などの著作を世に出すとともに、全国紙の論壇時評、「朝まで生テレビ」等メディアでも活躍し、文科省中央教育審議会の委員等も歴任。「複線化人生が重要」と語る上田特命副学長に聞いた若者への熱い思いを前・後編2回（11月号、12月号）にわたって報告する。

（聞き手は塚本隆編集長）

―東海学園大学の副学長就任から半年、率直な感想を。

上田特命副学長　私は愛媛大学に3年、東京工業大学に28年と、31年も国立大学に勤めましたので、私学は初めてです。高校生が少なく、特に規模の小さい私学にとっては、大変になっていることを痛感しています。名古屋大と岐阜大が同じ法人に統合されるなど地方の国立大学は統合していく方向ですね。私自身は、大学は経営が悪いからといって潰してはいけないと思っていますが、私学は年次計画を立てても、経営という意味で、バラ色の未来を描ける大学は日本にはないと思います。その中で東海学園大学は「ともいき」という理念を活かしつつ、斬新な改革を進めようとしています。

―最近の学生気質をどう見ていますか。

上田副学長　学生相手に教えてみて思うのは、やはり昔と大きく変わってきていますね。例えば、私が東工大に赴任した28年前、学生がもうちょっと生意気だったと思います。先生の間違っているところを探し出して、厳しい質問をどんどん仕掛けてくるとか、ね。今はちがいます。

―変化の要因は何でしょうか。

上田副学長　1990年初頭から大学は役に立たんことばかりしている、即戦力を出せと言われました。その頃から早く役に立って利得を最大にする人材を生み出せという要望が強まり、90年代の中盤から2010年代の中盤ぐらいまでは専門教育重視になり、教養教育が軽視される時期が約20年が続いたわけです。高校も文系と理系を早めに分けて、大学入試に出る科目を徹底的に学習する方向にシフトしました。学生は自分の成績や評価ばかり気にして、本質的な疑問を持たないようになっていきました。

―名古屋の学生、地域の印象を聞かせてください。

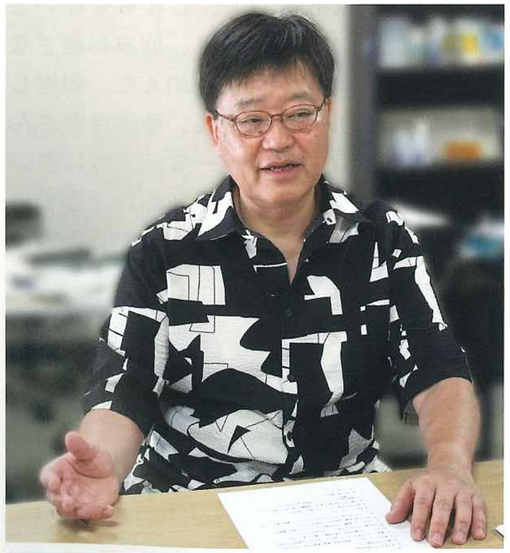
上田副学長　名古屋の場合は、学生があまり外に出て行かない印象ですね。自分たちは名古屋で就職して仕事をしていくという意識がすごく強いと思います。いい就職先が多い、との考えがあるのではないでしょうか。私は天白区に住んでいますが、家賃の安さには驚きました。給料がある程度あれば経済的な利得からは、名古屋に住むのは安定でしょう。東京はものすごい競争社会ですから、転職も多く、労働市場は流動化しています。名古屋の場合は、チャレンジするよりも安定を求めるという今の学生さんの気質にとっても合っていると思います。でも、悪い意味では、もう日本の経済にせよ科学技術にせよ、チャレンジしないでどんどん沈んでいくような イメージを私は持ちますね。

―愛知の企業でも多くの講演をされています。

上田副学長　ブラザーさんやデンソーさんで講演していますが、安定化したところからよりイノベーティブな方にシフトしなければとすごく考えておられますね。東京や大阪でも企業や経済同友会などでこのところ講演の依頼が増えていますが、失われた20年、リベラルアーツ（教養）を学ばずに大学を出たり、中等、高等教育をやってきた人たちが今、管理職になろうとしていて、なかなか大変ですね。イマジネーションというか、イノベーション的なものを生み出せない現状があり、リベラルアーツが見直されています。デンソーさんなどから、リベラルアーツの話をしてくれと言われるのは、やはり企業には何かを変えたいという意向があるのを感じます。

―東工大でリベラルアーツ教育を実践されました。考え方を教えてください。

上田副学長　リベラルアーツは「人間を自由にする技」を意味します。古代ギリシャ・ローマ時代の「自由市民」になる学問が原義です。教養教育ということもできます。1人1人の志は個性がありますから、その人たちが切磋琢磨しながら学び合うことをテーマに掲げました。とにかくいい成績を、大学で優秀な成績を取っていればいい人生が開けるとみんな思っていますが、それで人生100年時代にいい人生が送れるわけではありません。そもそも、大学でいい成績を取りたいというぐらいの志では、イノベーションが起こせませんね。成績、評価を目指していく学生さんは、結局のところ、誰かが作った問題を解くことはできても、次の問題を作り出すことができませんよね。



―どのような教育内容でしたか。

上田副学長　いい成績を取りたい、お金をたくさん儲ける方がいい、という単一な指標を抜けだして、学生たちの相互コミュニケーションの中で、志を立て、育むことを目指しました。大学1年で東工大立志プロジェクトという授業を必修にし、大学3年では 教養卒論というリベラルアーツの卒論、あなたがこれから取り組んでいくテーマ、研究室に所属して取り組んでいるテーマが世界をどう変えていくのかとか、あなたはどこにワクワクするのかとか、そういうことを5000字から1万字 でまとめて書いてくれ、と指導しました。

―学生にとっては目から鱗ですね。

上田副学長　第1回目はジャーナリストの池上彰さんの話を聞き、その後も劇作家の平田オリザさんのコミュニケーションの話、あるいは哲学者、お坊さんや、水俣病の支援活動をしている方に来てもらって、講堂で話をしてもらいます。聞くだけで終わりではなく、1クラス28人の少人数クラスを40クラス作って、その中で4人1組で議論します。池上さんのどこが良かったとか、どこが納得いかないとか。そういう批判的思考はものすごく重要です。また途中でブックリストの中から本を1冊選んで、書評を書いて、みんなで読み合わせます。そうした新カリキュラムの結果、多様な世界の現実とか、矛盾し合う世界の様々な問題を知り、その中で頭を使うということで、非常に考えが深くなりましたね。もっとも1年目の学生さんは、それまでの東工大だと思って入ったら、急にリベラルアーツと言われたんで、騙し打ちに遭ったという学生がかなりのパーセンテージいたと思いますが。

（12月号・後編に続く）

上田紀行（うえだ・のりゆき）１９５８年生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。岡山大学で医学博士号取得。専攻は文化人類学。スリランカで悪魔払いの風習やスリランカ仏教から宗教や癒しを研究。９６年度から２０２３年度まで東京工業大学に在籍し、リベラルアーツ研究教育院長、同大副学長を歴任。４月から名古屋市天白区の東海学園大学特命副学長・卓越教授に就任。「生きる意味」「立て直す力」「覚醒のネットワーク」など著書多数。妻は元NHKアナウンサー武内陶子さん。落語家の春風亭小朝は従兄弟。

上田紀行
東海学園大学特命副学長
インタビュー 後編

東海学園大学（名古屋市天白区）の上田紀行特命副学長はリベラルアーツ教育を東京科学大学（旧東京工業大学）で先駆的に実践した。東工大副学長を務めた上田氏はメディアで現代社会の「生きづらさ」への提言を続ける学者としても知られる。若者から悩める大人まで豊かな人生とは何かを説く「生きる意味」（岩波新書）「かけがえのない人間」（講談社現代新書）などの著者にして碩学の文化人類学者の話に引き続き耳を傾けた。

（聞き手は塚本隆編集長）

自分を広げ、深めて、人生の大きな「志」に出会ってほしい

―スリランカでの研究。宗教と癒しについて教えてください。

上田特命副学長　スリランカのフィールドワークをしたのは、私が27から29歳ぐらいの時、随分昔です。当時の日本には、「癒す」という動詞はありましたが、「癒し」という名詞はありませんでした。そこで私が言い出したので、私は業界では〝癒しの上田さん〟とずっと呼ばれ、「癒し」という言葉を作った人と、よく言われましたが、その原点はスリランカの悪魔払いですね。スリランカに行って、村祭りで、元気じゃない人が元気になることがあるらしいと聞いて見てみたいと思いました。スリランカは多民族国家で、シンハラ人が８割ぐらいの人口を占め、多数派は仏教徒。悪魔払いが行われるのは田舎です。

―悪魔払いとは。

上田副学長　無知蒙昧な人たちが悪魔払いをしているわけではありません。病院、医療は完備しているのに治らない病、例えば、お父さんが生きる元気がなくなり家で酒ばかり飲んでいるとか、子供が不登校になって閉じこもっているとか、お母さんが何かのストレスで悪夢ばかり見ているとかですね。星占いはスリランカではとても流行っていて、公共の建物の竣工時間も星占い師に相談するくらいなんですが、星占い師に聞くと、その時間、あなたは悪魔に襲われやすいなどと言われたりするわけです。

悪魔払い、それは緊迫した、しかし楽しい徹夜の村祭りで、患者さんを治していきます。悪魔払い師は４人のダンサーと２人のドラマーで行い、最初はダンサーたちの踊りから始まり、深夜になってドラマーが激しくたたき出すと、患者さんの中にはトランス状態で踊り出す人もいます。捕まえて、「お前は誰だ」「○○悪魔だ」「何月何日に来た」「仏さまの命令に従って去るか？」「去る」とか、憑依した悪魔と緊迫した会話になります。その後はひたすらお祓いのような儀式が続き、そのクライマックスでは呪術師が自ら患者の悪魔を吸い取る段になります。

その後朝方になると仮面を被った悪魔が次々と出てきてダジャレ、下ネタなどギャグのオンパレード。２時間くらいは村人みんなが笑いの渦になります。

―それで完治ですか。

上田副学長　８割方良くなっていますね。それでどういう人に悪魔がつくのかというと孤独な人。孤独な人に〝悪魔の眼差し〟が来るという風に言います。私たちも「俺って見捨てられたんだ」と思うことがありますよね。親の一言や、友達、上司の言葉であれ、ひどいこと言われたりして、「俺、こんなに頑張っているのに、なんでこんなひどいことを言われなきゃいけないんだ」とか人生のいろいろな場面で、「なんで誰も助けてくれないんだ」となります。そんな「神も仏もあるものか」、みたいな究極の孤独に陥った時に、悪魔が来るわけです。でも悪魔払いの村祭りでは私のためにこんなに集まってくれたということが分かる。周囲の人々にも仏さまにも感謝ですよね。

―何かのきっかけで変わる自分を周りも認めてくれるということですね。

上田副学長　その通りですね。あと大切なのは、子供たちが小学生ぐらいから悪魔払いを見ていて、人が救われる場面を何回も見て成長するということですね。だから「自分も不調になったら周囲の人たちが助けてくれる」と思って育つわけです。日本に悪魔払いのような場面がないのはまずいですよ。ある意味で悪魔払いのエッセンスみたいなのを教育の方にも入れていかないと。今の子どもたちのように孤立し、自分の評価ばかり気にしている状態は、悪魔憑きになりやすい。会社員も自分の評価に縛られ、ちょっとまずくなった時に会社に行けなくなり、ストレスで心身症を引き起こす人も多いですね。

―子供はもちろん大人にも逃げ場が必要ですね。

上田副学長　日本社会は何かいい方法を見つけなきゃいけないですね。人生の逃げ場、人生の複線化が必要ということを『人生の「逃げ場」』という本で書きました。会社とか学校での評価といった、人生が１本の線しかない人は、それがダメになった時がおしまい。もう１つの線を持っていることが大切なんです。それが宗教であれ、趣味であれ、あるいは地域社会であれ、私はこっちの仕事とか学校の成績がダメになっても、もう１本、別の人生を走ることができる線がある。それが「志」にもなるのです。

―複線化は企業の人材育成にもつながる考えですね。

上田副学長　今後の人材育成は、偏差値とか業績とかいった一本の線ではなく、多様な能力の掛け算から生まれる立体的なものでしょう。「できる人」から「魅力的な人」への転換です。そんな人間を育てたいですね。できる人間も大切だけど、魅力的な人間が世の中を動かすことが多いように思いませんか。でも今までの教育は魅力的な人を育てるという意識が低かった。

即戦力という言葉がありますが、すぐ役に立つものはすぐ役に立たなくなるという言葉もあります。MIT（マサチューセッツ工科大学）に行った時に、学務部長で宇宙工学の権威のヘイスティングス教授が、MIT では先端科学なんて教えていないという。科学技術の進歩のスピードは速く、５年前の知識は役に立たないし、その間で分野が１つ吹き飛ぶこともある。つまり、その時点での即戦力よりも、分野ごとなくなっても、新たな分野を自分の力で作り、推し進めていく力の方が大切だということですよ。

人を自由にするのがリベラルアーツ、それが今求められているのは私たちが自由になっていないからです。評価や忖度でがんじがらめになっている人が多い。だから、単線の考え方から自由になり、やはり人間としての１番の喜びとか、私がやりたいことをちゃんとやるんだという「魂の自由」が確立される必要がありますね。

―学生や若者にメッセージをお願いします。

上田副学長　世界は広いです。10代とか20代前半で世界はこんなものだっていう風に狭めてしまうと、人生100年が全部狭まってしまいます。若い時は広い世界を見てほしい。あと、偏差値や目先の評価など一本線で人間を測る傾向が強まっていますが、人間の能力はそんな薄っぺらなものではありません。、コミュニケーション能力や自由な発想力、他人の苦しみに寄り添う力などもっと立体的なものですよ。だから外国旅行や留学は強力に勧めますね。国内旅行やインターンシップもね。狭い世界の中での評判とか評価を気にするのではなく、自分を広げ、深めて、人生の大きな「志」に出会ってほしいですね。

―ありがとうございました。

上田紀行（うえだ・のりゆき）　１９５８年生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。岡山大学で医学博士号取得。専攻は文化人類学。スリランカで悪魔払いの風習やスリランカ仏教から宗教や癒しを研究。９６年度から２０２３年度まで東京工業大学に在籍し、リベラルアーツ研究教育院長、同大副学長を歴任。４月から名古屋市天白区の東海学園大学特命副学長・卓越教授に就任。「生きる意味」「立て直す力」「覚醒のネットワーク」など著書多数。妻は元 NHK アナウンサー武内陶子さん。落語家の春風亭小朝は従兄弟。